

農工研ニュース49

No.49 2007.5

CONTENTS

表紙	●農村の良好なサウンドスケープを地理情報システムに保存する ……………1
巻頭	●本来やるべきことをきっちりと一所長に就任して ……………2
農工研の動き	●技術支援・災害派遣 ……………3
	●一般公開、盛会のうちに終える
	●平成18年度の農村工学研究所主要研究成果 ……………4
研究成果	●サトウキビ栽培におけるバイオマス炭化物の利用 ……………5
	ーバイオマス炭化物の施用がサトウキビ生育および流出する硝酸態窒素へ及ぼす影響解明ー
研究の視点	●交付金プロジェクト研究「ソフト機能」の現地研究会を開催して ……………6
研究紹介	●農業用水路系の性能規定化に向けて ……………7
プレリリース	●アブラナ科の植物（ハクサンハタザオ）がため池底泥土のカドミウム濃度を低減させる効果を確認 ……8
平成18年度農村工学研究所研究会報告・受賞	

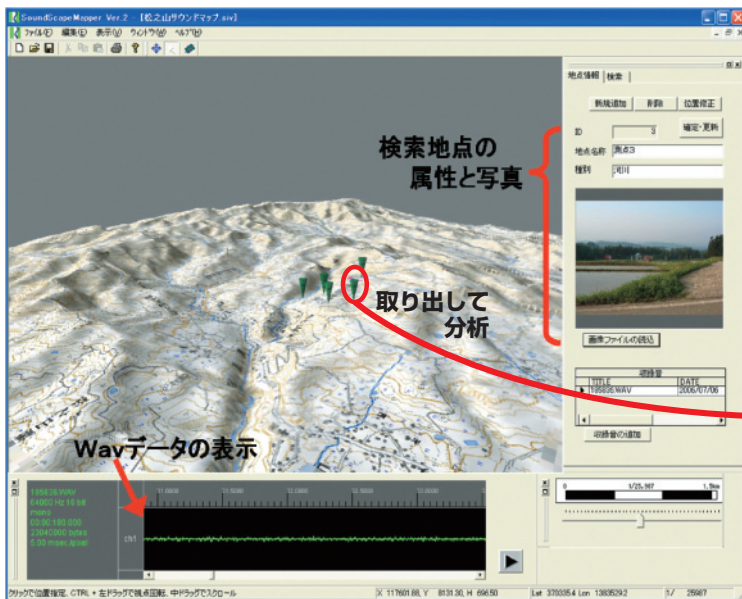


図2. 3次元で表示したサウンドスケープマップと付属データ



図1. 地図上への音声ファイルの設定

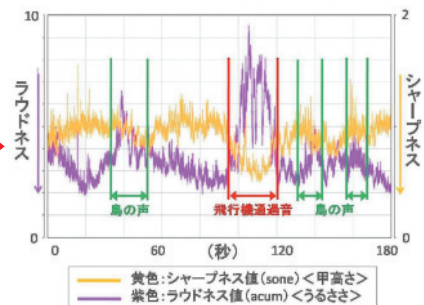


図3. ラウドネスとシャープネスの評価
((株)小野測器の音質評価システムを利用)

農村の良好なサウンドスケープを地理情報システムに保存する

景観法が制定され、全国各地で様々な景観施策が進んでいます。しかし、これらの施策は視覚的なデザインに関するものが多く、聴覚的なデザインについては取り組みが少ないようです。農村地域には、水・生物・農作業等の良好で農村らしい多様な環境音が存在し、これらの音は視覚的な要素とあわせ良好な景観を築く重要な資源の一つです。そこで、農工研では、農村地域にどのような環境音が存在しているのかを地図上に収集・整理するためデータベースシステムを開発しました。これにより、農村地域のサウンドスケープ（音の風景）の保全を推進するとともに、音質評価を通して、人にやすらぎを与える環境音の分析を進める研究に取り組んでいます。このシステムでは、音声ファイルを地図上の位置、写真と連動して整理することで、音の地図アルバムを作り、3次元地図表示することができます（図1，2）。このデータベースから音声ファイルを直接取り出し、音質評価をすることによって（図3）、サウンドスケープにも景観にも配慮した地域環境づくりに利用できます。

（農村環境部景域整備研究室長 山本徳司）



農研機構 理事(専門研究担当)
農村工学研究所長

小 前 隆 美

本来やるべきことをきっちりと — 所長に就任して —

地震ニュースでプレートの動きが解説されていますが、30年前、このプレートテクトニクスはまだ「説」でした。また当時は地球温暖化も「説」の段階で、現実感を持った人は多くありませんでした。しかし今日では、異常気象など顕在化した現象が人々の日常生活を襲っています。

わが国には問題が顕在化しなければ技術開発予算が確保できない体質があり、いつの時代にも、必要とされる技術の開発は決して十分ではありません。また、政策の転換等、社会情勢の変化によって必要とされる技術も変わります。このため、国の研究機関は常にあらゆる仮説を掲げ、いかなる場合にも対処できるよう先駆的な研究開発に取り組んで行かなければなりません。

この研究所の活動を顧みれば、研究の進展には著しいものがありました。例えば、降雨流出解析の研究は地表水と地下水を一体とした地域水循環のモデル化に至り、基幹施設の水理設計法の研究は農業水利システム全体の効率的な管理手法に至り、農地整備の研究は自由に水分管理ができる大規模汎用農地の整備技術に至るなど、科学的可能性を次々と具体的な技術として実現し、農業・農村の振興に貢献してきました。その背景には、行政部局に在る研究ニーズを的確に捉え研究成果を確実に受け渡す行政支援活動を固有の機能として推進するという、一貫した組織哲学がありました。また、外的事情に対応して研究部・室の改廃や組織再編を繰り返し

ながら機関機能を維持・発展させてきた先輩達のご苦勞がありました。

しかしながら、現状を厳しく自己評価するならば施策の推進を支援する技術開発に追われ、新施策の企画を先導する研究活動はまだまだ不十分な状態です。

私はこの度、農研機構の理事に就任し、農村工学研究所長の役割を担うことになりました。国の研究機関は、独立行政法人化後6年の間に統合、再編、非公務員化を経て、今では外的事情による組織改変ではなく内的力量を高めて自発的に体制や運営構造を変えていく段階に入ったと認識しています。

私は、農村工学研究所がこれからも農村研究の中核機関として、行政支援型の研究機関として、内的力量を高めつつその固有の機能をしっかりと発揮するよう努めてまいります。中期目標の達成は当然のこととし、長期的な研究開発にも取り組んでまいります。

目先の評価を目指すのではなく、本来やるべきことをきっちりやって、結果として高い評価を受ける、そのような運営を心がけてまいります。皆様のご理解とご協力をお願いいたします。



技術支援・災害派遣

3月25日9時42分頃に、能登半島西岸付近の深さ11kmを震源とするマグニチュード6.9の大きな地震が発生し、石川県能登地方を中心に多くの農業用施設等が被災しました。農工研は、災害対策基本法に基づく指定公共機関として、農林水産省農村振興局からの職員派遣要請には、北陸農政局及び石川県と連携し、次のように機動的かつ的確に対応しています。

①第一次派遣（3月29～30日）[ダム・ため池の緊急危険度判定調査] 農業用ダム及びため池の構造解析が専門の谷防災研究調整役（現、施設資源部長）と毛利土質研究室長の2名を輪島市、七尾市、志賀町、能登町に派遣し、被災したため池等の危険度の判定と当面の応急措置を助言しました。

②第二次派遣（4月5～6日）[地すべりの緊急調査] 地形や地質特性を踏まえた地下水流動や地すべり観測が専門の広域防災研究チーム中里主任研究員と井上研究員を輪島市に派遣し、北陸農政局資源課地質官他に同行して、地すべり現場の安定性を診断し観測態勢を助言しました。

③第三次派遣（4月13日）[ため池の緊急安全性診断調査] 谷施設資源部長を志賀町に派遣し、ため池の堤体法面の変状、漏水状況、斜樋・底樋機能等を確認して、二次災害を防止するために必要な対策を

助言しました。

④第四次派遣（4月16～19日）[災害復旧工法等の技術支援] 一班5名の二班編成で、中能登（16～19日）にため池・海岸班（毛利土質研究室長・堀主任研究員・有吉研究員、林田構造研研究員、山崎交流共同研究員）を、奥能登（17～19日）に地すべり・農地崩壊班（藤森水田汎用化システム研究チーム長・若杉研究員、広域防災研究チーム中里主任研究員・井上研究員、海野特別研究員）を現地に派遣し、復旧工法を助言しました。

今後とも能登地方の農業・農村が従前の活気を早期に取り戻せるよう、行政機関との連携を一層強化し引き続き技術支援を行っていきます。

（企画管理部防災研究調整役 小林宏康）



—ため池堤体に発生した割れ目の危険度を診断—

一般公開、盛会のうちに終える

平成19年度科学技術週間（4月18日～22日）に伴う農林研究団地の一般公開は葉桜の下、4月20日に開催されました。農工研は「農村を探ってみよう—土・水・風景—」をメインテーマに主要研究成果の展示、各種実験、実演「宇宙、空から見たつくばエクスプレスの周辺の土地利用」、ミニ講演会「水と物質のダイナミックな動き



仮設プールで魚とのふれあい、併行して、大型水槽による魚の展示も行いました。

を探る」など多彩な出し物を多数出展しました。特に参加と実演による「ふれあい水槽のしくみ」、「たんぼや水路のお魚たちとあそぼう」コーナーは大人気で、楽しい科学、おもしろ実験の一端を多数の見学者に披露することができました。当日は天候にも恵まれ、見学者は前年比16パーセント増の1,289名でした。（一般公開実行委員会）



景観シミュレーターを使って、多くの中学生がそれぞれの感性で修景作業をしました。

平成18年度の農村工学研究所主要研究成果

No.	成果情報名	担当研究部・研究室名	区分	分類
1	ため池底泥土を用いたため池改修法	企画管理部防災研究調整役	技術及び行政	普及
2	老朽化フィルダムの性能照査型耐震補強法	//	技術及び行政	参考
3	農作業体験学習圃場としての休耕地の活用	農村総合研究部都市農村交流研究チーム	技術及び行政	参考
4	農作業体験学習における教育的効果の発現の特徴と効果的な取り組み方法	//	技術及び行政	参考
5	大規模農業用パイプラインのGISを用いた保守履歴管理システム	農村総合研究部広域防災研究チーム	技術及び行政	普及
6	地すべり予防保全のための応力変形解析手法	//	技術及び行政	参考
7	鉄筋コンクリート(RC)農業用水路のひび割れ形成機構と中性化の関係	農村総合研究部地域資源保全管理研究チーム	研究	普及
8	バイオマス多段階利用の都市近郊農畜産業型モデル	農村総合研究部資源循環システム研究チーム	技術及び行政	参考
9	成分調整家畜ふん堆肥製造用添加資材の選定のための成分特性一覧	//	技術及び行政	参考
10	高齢者等に配慮した生活道路のユニバーサル舗装材料	農村総合研究部水田汎用化システム研究チーム	技術及び行政	普及
11	マグホワイトによる大豆のカドミウム吸収抑制効果	//	研究	参考
12	デルファイ法による農村資源管理の将来予測	農村計画部地域計画研究室	技術及び行政	普及
13	都市と農村をむすぶワークショップ・プログラム	//	技術及び行政	普及
14	英国のパートナーシップ方式による流域環境管理	//	技術及び行政	参考
15	他出子弟の帰省・農作業手伝い行動の実態とその要因	//	技術及び行政	参考
16	円滑な意見集約を行うためのカード展開型ワークショップ手法	農村計画部集落機能研究室	技術及び行政	参考
17	農産物直売所が農村活性化の核として成長するための条件	//	技術及び行政	参考
18	初殻発電を例としたバイオマス資源利用のマクロ経済評価	農村計画部事業評価研究室	研究	参考
19	水田灌漑用水の経済価値定量化手法	//	技術及び行政	参考
20	非農家の協力が得られやすい農業用水路の維持管理作業案の探索方法	//	技術及び行政	参考
21	劣化進行パターンに応じた農業用水路の最適補修計画	//	技術及び行政	参考
22	農村地域におけるサウンドスケープを収集・整理する地理情報システム	農村環境部景観整備研究室	研究	普及
23	土地被覆と作業時間の把握にもとづく農村地域の管理状況の変化	//	研究	参考
24	水田域のフィールドデータを用いた魚類生息ポテンシャル推定手法	農村環境部生態工学研究室	研究	普及
25	同一水系のドジョウを対象とする遺伝的な個体群構造の分析手法	//	研究	普及
26	室内実験によるタモロコシの環境嗜好性の定式化	//	技術及び行政	参考
27	都市農村交流にむけた水田ピオトーブの整備・維持管理活動の方策	// 東京大学	技術及び行政	参考
28	畦畔埋設型水田排水浄化装置	農村環境部水環境保全研究室	技術及び行政	普及
29	水質改善シナリオ評価のための流域水質予測モデル	//	技術及び行政	普及
30	低平水田域の持つ洪水防止機能の定量的評価法	農地・水資源部水文水資源研究室	研究	普及
31	2次元FEMモデルを用いた氾濫湛水解析法とトンレサップ湖周辺への適用	//	研究	普及
32	流域における農林業環境対策の効果予測を目的とした三次元分布型水物質モデル	//	研究	参考
33	木曾川から濃尾平野への地下水誘発汚染現象の推定方法	農地・水資源部地下水資源研究室	研究	普及
34	汚泥層による畑地排水中の硝酸性窒素の除去技術	//	研究	普及
35	宮古島に設置したバイオマス変換プラント群のLCA	農地・水資源部農地工学研究室	研究	参考
36	サトウキビ栽培におけるメタン発酵消化液や廃棄系バイオマス炭化物の施用	//	技術及び行政	参考
37	用水路系の水理および水利用における性能指標	施設資源部上席研究員	技術及び行政	参考
38	水位に追従して自動開閉する機構を備えた取水口の浮遊性ゴミ流入防止装置	施設資源部水源施設水理研究室	技術及び行政	普及
39	歴史的利水技術の有する教育機能に着目した都市農村交流	//	研究	参考
40	水辺空間の伝統的生活行為の有する教育機能	//	研究	参考
41	階段式魚道におけるウグイの遊泳行動の解明と流況予測手法	//	技術及び行政	参考
42	パイプラインの継ぎ手形状が流れに及ぼす影響	施設資源部水路水理研究室	研究	普及
43	開水路系水理構造物のための水理機能診断票	//	技術及び行政	参考
44	農業用水路の非破壊連続画像撮影システム	施設資源部水利施設機能研究室	技術及び行政	普及
45	ゴム弾性を活用した農業用水路の目地補修工法	//	技術及び行政	普及
46	ポリマーセメントモルタルによる農業用水路の断面修復工法	//	技術及び行政	普及
47	2004年インド洋津波によるタイ南部沿岸農地の被害実態と除塩対策	//	技術及び行政	参考
48	リサイクルポーラスコンクリートの強度、微量成分溶出及び植生制御機能の解明	施設資源部構造研究室	技術及び行政	普及
49	農業用フィルダムの長期浸透及び変形挙動	//	研究	参考
50	地震時における地盤及び水路構造とその被害に関する検証	//	技術及び行政	参考
51	ため池の柔構造底樋工法	施設資源部土質研究室	技術及び行政	普及
52	土嚢を用いた高耐久性ため池工法	//	技術及び行政	普及
53	ため池底樋のバイピング発生メカニズム	//	研究	参考
54	地すべり調査のための深度別間隙水圧測定と検層用観測孔の作成方法	施設資源部基礎地盤研究室	技術及び行政	普及
55	基礎地盤詳細調査のための透過電磁波探査の波形解析技術	//	研究	参考
56	農業用無人ヘリ活用を想定した農地地すべり地の地形地質調査技術	//	研究	参考

付 関連機関農村工学成果情報

No.	成果情報名	担当研究部・研究室名	区分	分類
1	鉄付着防止暗渠土管による低コストな閉塞軽減効果	北海道立中央農業試験場	技術	普及
2	排水路の魚類相を改善する魚道等を用いた水域ネットワークの再生	愛知県農業総合試験場	技術	参考
3	簡易均平作業による田面不陸の修正	鳥取県農業試験場	技術	参考
4	農業者が行える防水モルタルを使った「簡易な水路目地補修作業の手引き」の作成	//	技術	参考

研究成果の分類

「普及」とは、主要成果の内容を普及奨励することによって、実益または実用化につながる事項。「参考」とは、「普及」以外の主要成果で、直接利用に移すには更に検討を要するが、速報的な情報として公表することが望ましい事項としています。

なお、これらの成果は「平成18年度農村工学研究所研究成果情報」として6月に刊行予定です。また、これまでの研究成果情報は農工研ホームページの成果ライブラリ (<http://nkk.naro.affrc.go.jp/library/>) からご覧いただけますので、ご利用ください。(企画管理部)

サトウキビ栽培におけるバイオマス炭化物の利用

バイオマス炭化物の施用がサトウキビ生育および
流出する硝酸態窒素へ及ぼす影響解明



農地・水資源部農地工学研究室長
凌 祥之

バイオマス炭化物の農地施用のねらい

サトウキビの収量と品質は、圃場の養・水分含量等によって影響されます。本研究では、保水性に乏しい島尻マーヅ土壌（沖縄の典型土壌）において、保水性等に富むバイオマス炭化物（農業集落排水汚泥炭（以降汚泥炭）とバガス（サトウキビ絞りかす）炭を農地投入することによって土層を改良し、①サトウキビ収量と品質を改善する可能性と②地下水の硝酸態窒素の低減対策として、炭化物の農地投入による水質改善効果を検討しました。



図1 各試験区におけるサトウキビの生育状況
左より対照区、バガス炭添加区、汚泥炭添加区

サトウキビ生育に与える影響

サトウキビの生育は、炭化物添加区が無添加区を上まわりました（図1）。汚泥炭を添加した区では、N（窒素）、P（リン）、K（カリ）成分を多く含むことからサトウキビの分げつが良く、栄養成長が盛んとなり、単位面積当たりの原料茎重は他の2区よりも多くなりました（図2）。一方、バガス炭添加区のサトウキビは可製糖率が最も高く、可製糖量は炭化物無添加区の1.8倍、汚泥炭添加区の1.9倍でした。これは、バガス炭の添加により土壌の保水性が向上し、根圏の水分量を十分に維持できたためと考えられます。

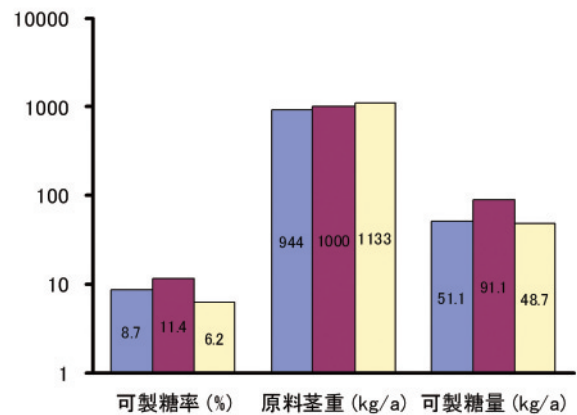


図2 各試験区におけるサトウキビの生育（収穫時）

硝酸態窒素の浸透流出に与える影響

栽培期間中における対照区、バガス炭添加区、汚泥炭添加区の浸透流出水量（積算）は各々2667, 2428, 2357mmであり、浸透流出水中の硝酸態窒素平均濃度は各々1.93, 0.90, 1.94g/m³でした。バガス炭の添加によって浸透流出水中の硝酸態窒素濃度が下がり、硝酸態窒素の全浸透流出量を対照区より59%削減できました。汚泥炭添加区においても、浸透流出水量の減少によって、硝酸態窒素の流出を11%削減できました（図3）。

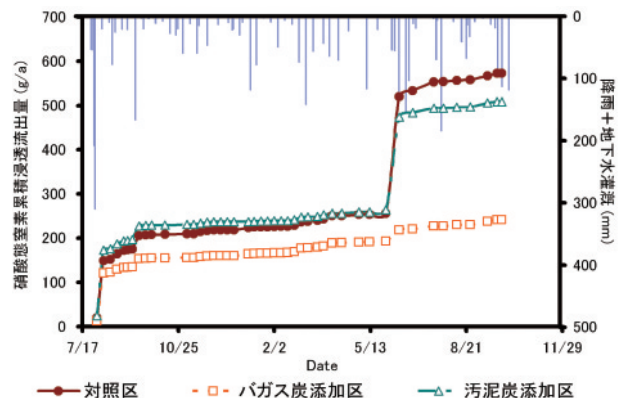


図3 各試験区における硝酸態窒素流出負荷量の変化

バガス炭の施用は、サトウキビ収量、品質の向上、さらに環境負荷の削減を図るために有効な方策として期待されます。



農村環境部環境評価研究室長
松森 堅治

交付金プロジェクト研究「ソフト機能」の 現地研究会を開催して

都市と農村の対流を取り上げて平成16年度から開始した交付金プロジェクト研究「中山間地域における対流に伴う教育・保健等機能の評価手法の開発」（略称：ソフト機能）は3年を経過し終了しました。ソフト系機能の研究を中心に9機関30名近い研究者が参画し、協働した専門分野は医学、教育学、建築学、造園学、土壌学、地域計画学、農村社会学、農業経営学、景観工学、景観生態学、水理学、農業工学など多彩でした。

研究対象とする都市と農村の対流は、それぞれの地域の活動内容とその活動の各段階において多様な課題を抱えています。そこで、研究を円滑に推進するため、参画する研究者が実際の現場で営まれている都市農村交流の実態に接し、議論を重ねることにより共通の認識を深め、個々の研究にフィードバックするというプロジェクト運営方針を採用し、毎年度の途中に現地研究会を開催しました。

初年目は、高速道路や新幹線で東京から2時間以内の距離にある利点を活かして早くから都市農村交流の活動が行われている信州東部の佐久・上小地域を、2年目は、札幌市の小中学生や修学旅行生など農業体験学習を受け入れる交流活動が行われている北海道空知地域を、3年目は、平成18年度から官民連携して体験型の都市農村交流に向けた推進体制づくりを進めている高知県から、本プロジェクト研究が実規模実践事例として取り組んでいる地区のある土佐市、いの町と日本で最初に棚田オーナー制を実施した檮原町を開催地としました。

現地研究会では、研究課題の検討、研究担当者の

講演に加えて、都市農村交流活動に携わる自治体、農家、NGO、企業等の方々に講演、見学を依頼しました。問題を抱える現地の方々との懇談、また課題担当者である我々が都市住民となって実規模の交流を行うことで、都市農村交流に関する研究課題を多分野の研究者と現地の人々が議論することで双方に有益な情報が得られました。

現地研究会を通しての印象について述べますと、都市農村交流を続けることの難しさです。先進の団体が世代交代に苦しみ中、後発の団体は当初から若い人を活動に巻き込む方法を探していました。また、都市農村交流でも情報技術の活用は必然の流れですが、両方の住民が望むのは仮想体験や経済性だけではなく人、農、自然を通じた現実の交流と信頼です。集落の地縁が薄れ写真の茶堂のようにかつての交流の拠点が失われる現実がある一方で、廃校を利用して地域の交流・振興が活発化する動きのように、都市と農村の人間活動が多様化、広域化、高速化する中で新たな地縁の模索を感じました。都市農村交流により地縁も血縁もない都市住民が簡単に田舎を体験できるようになりましたが、簡単であるが故にその絆は弱いものです。現地研究会を開催したことで、現場の問題を理解し我々の研究を永く使える丈夫な絆づくりに役立てたいという思いを研究担当者間で共有できたと思います。その結果は、都市住民を農村のサポーターとするためのワークショップ・プログラムの開発をはじめとする多くの研究成果となっています。



ゆすほら
街道に建つ茶堂（高知県檮原町）

かつて、旅人をもてなし、地区内の交流にも使われていました。今その役割の一部を果たしているのは道の駅や農産物直売所でしょうか。



実規模実践事例の寺野集落での懇談の様子（高知県いの町）
模擬都市住民として郷土料理のアンケート調査に回答



施設資源部 首席研究員
中 達雄

農業用水路系の性能規定化に向けて

1. はじめに

世界貿易機関（WTO）の技術仕様の性能規定化や農業水利施設の更新・保全事業に対応する機能診断や計画設計問題を背景に、その性能に着目した性能設計手法の導入が求められています。

性能設計とは、「設計対象のシステムに要求される性能を満たすかどうかを照査することを前提に、ソフト的な設計からハード面の設計までを極力自由化する一連の設計体系」を指します。

従来の仕様設計では、性能の実現のために各種基準や指針により、設計の手順や具体的な方法が明記されていましたが、性能は直接には扱われず、詳細な性能の規定化までには至っていませんでした。

このため、性能設計の導入には、システムの設計における各機能・性能の階層構造化、これらの工学的定義および各性能指標の定量化などの規定化の作業が不可欠となりました。

2. 性能設計導入の意識調査

性能設計の導入には、実務に携わる設計技術者の意識を事前に把握しておく必要があります。実施したアンケート調査結果では、導入の方法やその期待する効果などが把握できました（図1）。次に、性能規定化案に対する技術者および研究者などの合意形成が必要です。このため、研究段階として、規定化案を提示してのアンケート調査を繰り返して、試行的なシステム設計を進める中で規定化を行っています。

3. これまでの規定化の成果と今後の課題

用水路系の水理・水利用性能を対象に、これまでに、機能の定義と構造化（図2）、性能を照査する手法の整理および性能項目の抽出と指標の開発・整理を行いました（図3）。これらの成果は、行政部局の性能規定化の委員会等へ提供し、性能設計手法の構築に役立っています。今後は、各性能の指標（水準）の限界状態、管理水準、設計（性能）目標値の規定化が課題です。この規定化が実現出来れば、システムの機能診断の客観性と公平性が向上し、また、用水路を管理・利用する土

地改良区技術者、農家および関係者に、設計した施設の性能をより分かりやすく説明できるようにします。

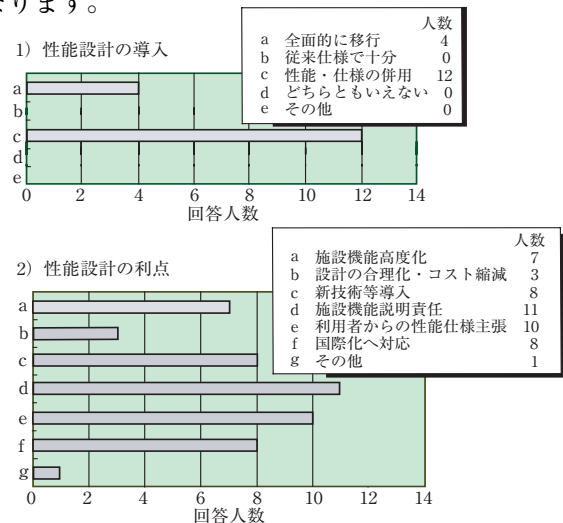


図1 意向調査結果（民間設計技術者、16名）

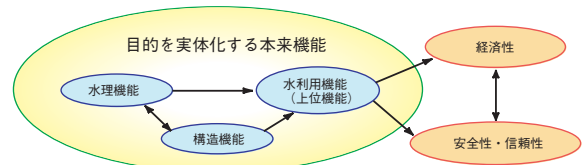


図2 用水路系の基本機能構造化案

		主要な要求性能項目	設計内容等
本 来 性 能	水 理 性 能	通水性（通水能）	平均流速公式、水路断面形状、エネルギー位、空気混入防止
		水理学的安全性（バイパスライン）	水撃圧予測、水撃圧対策、管種、水理学的安全性、リスク評価
		水位・流量制御性	比例制御、上流水位制御、下流水位制御、制御精度
		分水制御性	分水制御方式、分木工（口）型式
		水路内貯留性	水路内貯留量、調整池容量
	水 利 用 性 能	均等分水性	計画的に分水あるいは配水される程度、分水工（口）型式、減圧施設
		配水弾力性	各分水口で設計流量の範囲内で用水需要の変動に応答する程度
		操作方式（規定有り）	水理学的検討、水管理システム
		水管理方式	水理学的検討、供給主導型水管理方式、半需要主導型水管理方式、需要主導型水管理方式
		保守管理・保全性	管理、保守等の容易性
	対人安全性	水理学的検討、水路型式、安全対策施設	
	環境性	生物多様性、景観保全、騒音対策	

図3 用水路系の各性能項目試案（水理・水利用）

アブラナ科の植物（ハクサンハタザオ）がため池底泥土のカドミウム濃度を低減させる効果を確認（農村工学研究所グループ）

(独) 農業・食品産業技術総合研究機構農村工学研究所、株式会社フジタ技術センター、三菱マテリアル株式会社総合研究所のグループは、アブラナ科の植物（ハクサンハタザオ 写真1.2）を利用したカドミウム低減効果を、実際のカドミウム含有土を用いたポット試験（5作）及び屋外試験（1作）を行い確認しました。

本技術は、有害な重金属であるカドミウムを含有しているため池底泥土等をリサイクルするための技術の一環として開発されたもので、カドミウムの吸収率が高いハクサンハタザオを発見し、その吸収したカドミウムを回収する方法を提案しました。

今後、野外実証試験を継続し、長期的な土壌のカドミウム濃度の変化及び回収作業のコスト評価を行い、実用

的な回収技術の完成を目指します。

なお、本成果は農林水産省農林水産技術会議（4月）において研究成果の注目株として取り上げられました。

(施設資源部長 谷 茂)



写真1 ハクサンハタザオ



写真2 ハクサンハタザオの屋外栽培状況

農村工学研究所研究会報告

農工研では、研究成果や関連トピックスを広く外部に向けて発信・討議する研究会を毎年開催しています。今年度は3月14日、15日の両日、農林水産技術会議事務局筑波事務所共同利用施設において、研究者、農業農村整備に携わる技術者延べ297名の参加を得て開催しました。

基調講演では、神野直彦東京大学大学院経済学研究科教授(写真)から「地域社会が再生するために－公共サービスの役割－」と題する講演をいただきました。「地域再生とは、これから始まる時代における人間生活の「場」の創造であり、家族や地域を基盤とする「公」を再生し、大地の上に人間の生活を築く戦略である。こうした地域再生の動きが日本でも胎動し始めている。すなわち、地域社会に存在する「資源」を再発見し、住民が

地域経済の再生に主体的に取り組み始めている。」という講演趣旨を踏まえ、今回の講演では、日本型の地域社会の再生・自立のため、財政・政策面からどのようにアプローチするかについて大変示唆に富む有益な提言をいただきました。

その後、3つの会場に分かれ、それぞれの研究部が企画したテーマに即して所内外の講師による講演や口頭発表、総合討議などが行われました。

(企画管理部業務推進室)



写真 神野教授による基調講演

受賞

(平成19年2月3日～平成19年5月30日)

種別	氏名	所属・職名	業績等	年月日
2007年度日本農業経済学会奨励賞	合崎 英男	農村計画部事業評価研究室主任研究員	農業・農村の計画評価－表明選好法による接近－	H19.3.29
平成18年度ダム工学会論文賞	谷 茂	施設資源部長	固化処理土を用いた老朽化フィルダムの堤体補強における設計法の提案	H19.5.17

編集後記

農工研では「木材チップ」と「土壌硬化剤”マグホワイト”」を用いて、人と環境にやさしい「近未来舗装」技術を民間との共同研究で開発しました。今回の新舗装技術は路面温度の上昇を抑え、環境に負荷を与えるものを一切含んでいないのが特徴です。構内に試験舗装歩道(写真)を設けましたので、お越しの節は是非この柔らかい感触をお試し下さい(編集子)。



農工研ニュース No.49

2007年(平成19年)5月30日発行

編集・発行(独)農業・食品産業技術総合研究機構 農村工学研究所

〒305-8609 茨城県つくば市観音台2-1-6

電話 029(838)8169 (情報広報課)

<http://nkk.naro.affrc.go.jp/>